

ねん がつ みつか
2021年4月3日

ふっかつてつ や さい
復活徹夜祭

きくち いさおだい しきょう せつきょう
菊地 功大司教 ミサ説教

『あなた方は十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない』

ぼうりよくてき うば しゅ し なげ かな
暴力的に奪われた主の死を嘆き悲しむマグダラのマリアたちに天使が告げたのは、驚きの言葉であったことだと思います。

ぜつぼう ふち
絶望の淵にあったマグダラのマリアたちに、新たな希望の光として差し込んだ天使の言葉は、同時に新たな挑戦を突きつける言葉でもありました。

ふくいん しる
福音に記されている三人の女性の会話は、「あの石を誰が取りのけてくれるでしょうか」という、イエスの死とは全く関係のない心配事でした。すなわち、亡くなられたイエスとの出来事やその存在はすでに過去の思い出となり、彼女たちの関心は、今現在の心配事である石を取り除くことでありました。もちろん主を失った悲しみに心は満たされていたことですが、イエスご自身の存在は、思い出となり、彼女たちはすでに新しい時を刻み始めていた様を、この会話が描写します。

イエスの復活を告げる天使の言葉は、「あなた方は十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが」と述べています。天使は、彼女たちにとってのイエスがすでに過去の存在となっていることを、「十字架につけられたナザレのイエス」と形容することで示唆します。しかし、復活されたイエスは、彼女たちが過去の思い出として懐かしんでいるナザレ出身の十字架につけられて殺されたあのイエスとは全く異なっているのだ。新しい生命に生きている存在であるのだということを、天使は「ここにはいない」の一言で示唆します。その上で、これまでの過去の生き方との連続を断ち切るように促し、全く新たにされた生き方へと一歩を踏み出せと言わんばかりに、エルサレムを離れガリラヤへ行くようにと、旅立ちを促します。

きょうこう かいちよく ぼうとう みな とも く いえ まも せきむ してき
教皇はこの回勅の冒頭で、「わたしたち皆が共に暮らす家」を護ることに責務を指摘し
つつ、ヨハネ二十三世教皇の回勅「地上の平和」に触れています。

ちじょう へいわ ぼうとう じだい ひとびと た ま せつぼう ちじょう
「地上の平和」の冒頭には、「すべての時代にわたり人々が絶え間なく切望してきた地上
の平和は、神の定めた秩序が全面的に尊重されなければ、達成されることも保障され
ることもありません(「地上の平和」1)」と記されています。

へいわ かみ あた せかい ちつじょ かいふく かみ
すなわち、平和とは、神が与えられたこの世界の秩序を回復することであり、それは「神
とのかかわり、隣人とのかかわり、大地とのかかわり」を回復し、「皆が共に暮らす家」
を神が望まれるふさわしい姿に回復させることに含まれています。

しんこう い ところ うちがわ み かみ こじんてき であ たいげん ふか
信仰を生きるためには、心の内側を見つめて、神との個人的な出会いの体験を深めてい
くことも大切ですが、同時に、社会の現実の中でイエスの思いを実現し、神が望まれる秩序
を回復するために、具体的に行動することも不可欠です。神から賜物として与えられた
いのちを生きることは、「神とのかかわり、隣人とのかかわり、大地とのかかわり」を、
ふさわしいあり方に回復させる努力を続けることでもあります。

たみ こうかい みず なか とお どれい じょうたい かいほう あたら じんせい あゆ
イスラエルの民が紅海の水の中を歩いて、奴隷の状態から解放され、新しい人生を歩
み出したように、私たちが洗礼の水によって罪の奴隷から解放され、キリスト者として
の新しい人生を歩み始めます。つまり洗礼は、私たちの信仰生活にとって、完成では
なく、旅路への出発点に過ぎません。

ふくいん い かんたん て い かた わたし つよ
福音に生きるということは、簡単に手にはいる生き方ではありません。私たちは、強い
意志を持ち、たゆまぬ努力を続けることを通じて、信仰を守る挑戦の旅を続けるよう
に呼ばれています。

げんじつ せかい い わたし しんこう きょうこ たも い
もちろん現実の世界に生きている私たちにとって、信仰を強固に保って行くには、い
ささか困難を憶える様々な障害が立ちまわっていることでしょう。福音をのべつたえ
ることは言うに及ばず、キリスト者であると言うことでさえ、他の人に言うことも出来

ない、隠^{かく}しておきたい。そんな誘惑^{ゆうわく}の中^{なか}にあつて、洗礼^{せんれい}を受^うけたことだけで充分^{じゅうぶん}だ、もうそれ以上^{いじょう}は仕方^{しかた}がない、とあきらめてしまうこともあるやもしれません。まさしく、墓^{はか}に向かう途^む中^{とちゆう}に、「誰^{だれ}があ^あの石^{いし}を取^とりのけてくれるか」と、目前^{もくぜん}の困難^{こんなん}について話し合^{はな}っていた三人^{さんにん}の女性^{じよせい}と同じです。

でも彼女^{かのじよ}たちは、目^めを上げることによつて、そこに解決^{かいけつ}がすでに用意^{ようい}されていることを知^しりました。私^{わたし}たちも信仰^{しんこう}に生きるにあつて、どんな困難^{こんなん}にあつても、神^{かみ}に向かつて目^むを上げ^あることを忘^{わす}れないようにいたしましょう。そして、よりふさわしく福音^{ふくいん}に生きるために、妥協^{だきよう}に充^みちた簡単^{かんたん}な方法^{ほうほう}ではなくて、困難^{こんなん}な道^{みち}を選^{えら}び取り、強^{つよ}い意志^{いし}とたゆまぬ努力^{どりよく}の内^{うち}に、常^{つね}に挑^{ちようせん}戦^{つづ}し続ける旅路^{たびじ}を歩^{あゆ}んでまいりましょう。